
細川ハルトの転生

フクヤン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

細川ハルトの転生

【Nコード】

N8371W

【作者名】

フクヤン

【あらすじ】

ある日ごく普通の高校生、細川ハルトは死んだ。しかし、目が覚めるとそこには神が居て… タイトルを細川春人の転生から、細川ハルトの転生に変更しました。

プロローグ（前書き）

初めまして、これが初めての投稿となるフクヤンです！
作者は文才は皆無です。

なので見苦しい物になるかもしれませんが、暖かい目で見守ってください。

ブローグ

今思えば、あの日は本当に不幸続きだった。

学校には遅刻するし、弁当を忘れて購買のパンを買うことになり、体育があるというのに体操服を忘れたりと、色々あった。

そして、下校途中にそれは起こった。

「あれは…子供!？」

横断歩道で信号待ちをしていると、歩道から飛び出す子供の姿が見えた。

同時に子供に迫るトラックも見えた。

「危ない！」

俺は叫びながら走り出した。

子供は俺の声に気付きトラックの存在に気づいたが、トラックは子供の目の前まで迫っていた。

「間に合え！」

俺は横向きに飛び子供を突き飛ばしてアスファルトに着地する。その直後、強い衝撃と共に吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

「ぐっ！」

子供の無事を確認すると、俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！
感想、アドバイス等お待ちしております！

神と転生（前書き）

1話です！

神と転生

俺が目を覚ますと真っ暗な世界で浮いていた。あれ？俺は確か子供を助けて…ああ、俺は死んだのか…

じゃあここはあの世なのか？

「そう。ここは死後の世界。あなたは死んだのです」

ん？俺の目の前にいる女性も既に死んでいるのか…

「わたしは神です」

なるほど。さっきから心をよまれているのは神の力か。

「そんなところです。…実はあなたに話があります」

神様が俺に話？

「あなたは自分の命を捨ててまで子供を救ったとても優しい心を持っています。今の時代ではあなたのような優しい心を持つ人間は少ない。なのであなたには転生できる権利を与えます」

「どういうことですか？」

「あなたには転生できるチャンスを与えます。転生するかしないかはあなたに任せますが」

「もちろん転生したいです。で、俺が転生する世界はどんな世界なんですか？」

「涼宮ハルヒの世界です。あなたはそこで異世界人として過ごしてもらいます」

涼宮ハルヒシリーズは俺が好んで読んでいたライトノベルだ。原作も全部読んでいたし、アニメもちよつとだけ見たことがある。でも俺という存在が原作を変えたりするとまずいんじゃない…

「その事については問題ありません。あなたが存在することによってあなたの世界の原作が変わることはありません。平行世界、パラレルワールドというやつですね」

それなら大丈夫か。でもひとつ気になることが…

「異世界人としての特殊能力とかはあるんですよね？」

「もちろんです。あなたは情報操作に影響されません、たとえ涼宮ハルヒの力であってもです。もうひとつが閉鎖空間の発生が感知できるようになります」

ほうほう、なかなか嬉しい能力だな。でも閉鎖空間は感知しかできないの？入れたら嬉しいんだけど…

「そんなわがままはいけません。転生を取り消しますよ」

「あ、ごめんなさい。でも、せめて入れるように……」

「蹴りますよ？」

蹴り？なんだかしっくりこない。

「じゃあ殴りましょうか？」

いや、その…すみません、どっちも嫌です。

「よろしい。それとあなたに質問があります」

「はい？」

「男か女。どちらがいいですか？」

へ？そりゃあ男ですよ。生を受けて18年の間を男として過ごしてきたんだし。

「なるほど、それもそうですね。では男の娘にしましょう」

「え？漢字が違いますよね……」

「そろそろ行ってもらいます。目を閉じてください」

「え！？ちよつと待って……」

「頑張ってくださいね」

「うあああ……」

突然強い眠気に襲われ、俺は眠ってしまった。

神と転生（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

転生と悲劇（前書き）

更新が遅れてすみません
2話です、短いです。

転生と悲劇

俺が目を開くと知らない男と目が合った。その男は笑顔になって俺を抱き上げた。

…抱き上げた？ああ、俺は今赤ちゃんの状態で、この人が新しい父さんか。優しそうな人でよかった。

そつえば新しい母さんの姿が見えないが…

俺は母さんを探そうと首を動かそうとするが、まだ首が座っていないため動かせない。不便だな。仕方なく俺は声をだそうとする。

「あう…あうあ…」

駄目だ、歯がないから上手く声が出せない。

「ほら、見てみるよ母さん。可愛いぞ〜」

親父がそう言って、母さんに俺を受け渡した。おお、かなりの美人だ。息子として誇らしいぐらいだ。

「あら本当、とっても可愛い。もう、名前は決まってるの？」

「ああ。ハルトだ。」

「いい名前ね。」

母さんはそう言って優しく俺を撫でる。ハルトか、前の世界と同じ名前だ。ということは名字も一緒かな？俺の世界の母さん達は元気かな…

俺が前の世界の両親を思い出しながらボーツしていると、父さんが俺をくすぐり始めた。

む、なんだ父さん。残念だが俺は昔からくすぐり攻撃は効かない

なんだよ。前の父さんにしょっちゅうやられてたからな。
痛っ！ってでこピン？いちおう赤ちゃんだから泣いちゃうよ？母
さんが見てる前で泣いちゃうよ？…うん、泣いちゃう。

「びええええ！」

「え！？ああ、すまんすまん、泣き止んでくれ」

泣いた俺を父さんが揺すって泣き止まそうとする。母さんはそれ
を見て微笑んでいる。いや父さんを叱らないの？

まあいいか、そろそろ泣き止もう。

俺が泣き止んだのを見て父さんがほっと息をはく。

「そつえば、もう一人の子供はどこに居るの？」

え？もう一人？俺の兄弟かな。

「未熟児らしくて、もう少しかかるそうだ。」

ふ〜ん、じゃあもしかして双子なの？じゃあ俺の妹or弟になる
のか。

それって一卵性？二卵性？

そしてしばらくの間父さん達とじゃれた後、俺は眠たくなり、寝
た。いや、無意識の内に寝たんだよ。

俺は大きな爆音で目を覚ました。

爆音って…もしかして爆発！？

また大きな爆音が聞こえたかと思うと大きな悲鳴が聞こえた。爆
発に間違いない。

何がどうなってるんだ。何で病院で爆発が起こるんだ？外からは消防車のサイレンが聞こえてくる。

周りでは炎がめらめらと燃えておえり、煙が充満していた。そこで自分の口にハンカチが当てられていることに気づいた。

「大丈夫、大丈夫だからね、ハルト。」

母さんだった。自分は苦しそうに咳き込んでいるのに、俺を守るため抱き抱え、煙を吸わないようにハンカチを当ててくれていたのだ。

向こうの方に防火服を着た数名の男性が目に入った。キヨロキヨロしていて、こっちには気づいていないようだ。

「た、助けて！」

母さんが叫んだ。声はかすれて聞き取りづらかったが、レスキュー隊員が俺と母さんに気づいたようで、こっちに向かって走ってくる。

「大丈夫ですか!？」

俺は母さんからレスキュー隊員に手渡された。レスキュー隊員は母さんも助けようと背中におぶった。

「恐かったろう。もう安心だ。でも、よく泣かなかったね」

なんとって精神年齢は18ですから。

気がつくと思散った扉があったであろう出入口が見えてきた。はあ……なんでこんなことに……

俺が安心しきっていて油断したその瞬間、すぐ近くで爆発が起こ

って、その爆風が母さんと俺に急激に迫ってきた。俺は強い熱と衝撃を感じたのと同時に意識を失った。

転生と悲劇（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

女顔と野球（前書き）

すいません！遅れました。

長かった職業体験が終わったので投稿できました。

体験先は保育園だったのですが、子供が物凄くかわいくて癒されました。やっぱり子供はいいですね！

3話目です！

女顔と野球

俺が意識を取り戻すと、目の前には白い天井が広がっていた。こは病院か？じゃあ、あの爆発事故は夢だったのか？

俺がそんな事を考えていると、近くにいた看護師らしき女性が、俺が起きたのを見て驚き、近くに居た他の看護師を呼んだ。呼ばれた看護師も俺を見て驚いた様子だったが、すぐに悲しそうな顔になる。どうしたんだろうか。

「お……が……死ん……って……可……想。」

看護師が何か言っているが、俺は保育器の中に入っていて、うまく聞き取れない。看護師の表情を見ると、俺にとってよくないことが起こっているのは間違いないけど……もしかして、あの事故は夢じゃないとか？もしそうだったら、転生初日からハードすぎないか、神様？

両親を亡くした俺はその後、母さんの兄弟の家に養子として引き取られたのだが、信じられないことがわかった。なんと、母さんの旧姓は『涼宮』で、もちろんその兄弟も『涼宮』だったのだ。しかも、俺を引き取った家には産まれて数カ月の女の子がいたのだ。

ここまで言えば分かるだろう。その女の子の名前は『ハルヒ』で、俺はそのお涼宮ハルヒの義理の弟になったのだ。神様、俺をハルヒの弟にしたかったんなら、初めからそうしておいてくれよ。あの事故は無駄に俺の心は傷付いた……

俺がハルヒの弟となって12年が過ぎた。現在、小学六年生。

今のところハルヒは、容姿以外は普通の女の子だ。まあ、性格は北高時代よりはマシだと思うが…それでもハルヒのことが好きだという話も珍しくないけどな。

「ハルちゃん。どうしたんだ？考え事？」

俺の友人が話しかけてきた。

「別に、何でもない。それより、そのあだ名どうにかならないか？女みたいじゃないか。」

「いいじゃん、女みたいな顔してるし。私服だって女みたいな服着てるじゃん」

…本当に子供って容赦ないよね。まあ、こいつも悪気はないだろうけどさ。

そうなんだ、俺はよく女に間違えられるんだよ。

ただでさえ神様の力で女顔なのに、母さんが面白がって、髪も肩にかかるぐらいの長さまでしか切らせてくれないし、背も小さいし、声だって変声期を過ぎても高いままだ。

このあだ名だって、小4の時に、こいつが「ハルトって女みいたいな顔してるよな」という一言でつけられたあだ名だし。

他にも男子トイレに入ろうとしたら、白い目で見られるし、市民プールで着替えるために更衣室に入ろうとすると、警備員に止められたり…

他にもエピソードはたくさんあるのだが、その話はまた今度しよう。

「そつえばハルヒは？教室には居ないけど」

「さあ、もう帰ったんじゃないか？」

あいつ置いていきやがったな。まあいいや、珍しいことでもないしな。

じゃあ、こいつと帰るか。

「じゃあ、一緒に帰ろう」

「わかった。じゃあランドセル取ってくるから、待っていてくれ」

そう言っただけでランドセルを取りに行った。

そういえば、あいつの名前を言っていなかったな。あいつは今村巧という、普通の男の子だ。

小1の時から付き合いで、よく一緒に遊んだりしてる、親友というやつだ。

「お待たせ。んじゃ、帰ろうぜ」

巧が戻ってきた。

俺はそれを確認して自分もランドセルを背負う。

「ところでさ、涼宮さんってモテるよな。実は俺も狙ってたんだ」

へえ、それは初耳だな。でも親友として言うておく。

「やめとけ。そのうち性格が破綻するから」

少なくとも今年中に。

「はあ？　どういう意味だよ。お前も狙ってたのか？」

「何を言ってるんだ。俺達は仮にも姉弟だぞ。俺はそういう特殊属性を持ち合わせていないよ」

「お前が望んでなくても、男からモテている時点で怪しいぞ？」

……それも初耳だ。

「…マジ？」

「マジ」

ちくしょう、神様が俺を男の娘にしたせいで俺は男からモテると
いう背中をウジ虫がはい回るような体験をすることになったんだ！
その後、俺と巧は喋りながら下校した。

家に帰った俺は、部屋でマンガの週刊誌を読んで時間を潰してい
る。

こっちの世界のマンガは元々俺が居た世界のマンガとほとんど一
緒だったから、好きだったマンガもあった。

さすがに、本屋のライトノベルコーナーに涼宮ハルヒシリーズは
置いていないだろうけど。

俺が週刊誌を読み終え音楽でも聴こうとイヤホンに手を伸ばすと、
扉が物凄い勢いで、蹴り開かれた。言うまでもないがハルヒだ。

「夕飯できたわよ。さっさと、降りてきなさい！」

それだけ言って、ハルヒは扉を閉めた。本当に台風みたいに突然
やってきて突然去っていく奴だな。

ベッドに腰掛けていた俺は立ち上がり、扉を開ける。なんだか軋
んで開けづらい。そろそろこの扉も寿命か、主にハルヒのおかげで
下に降りると、俺以外の家族全員が揃っていた。

「遅いわよ！」

「無茶言っな。まだ、2分も経ってないだろ」

母さんがいただきますと言って全員同時に食べ始める。今日の夕
飯はロールキャベツだ。

「そうだ、ハルト。ハルヒにはもう言ってるが、今週の土曜日は暇か？」

父さんが言った。

「土曜日？一応、予定は何も無いけど」

「じゃあ、野球を観に行かないか。会社の同僚からチケットを貰ったんだ。調度、四枚ある」

「ふーん、いいよ。断る理由は無いし、面白そうだし」

よく、父さんは俺を遊びに誘ってくる。先々週も買い物に連れていつてくれた。何でだろうね？

ちなみに、野球は今回が初めてだ。

「迷子になるんじゃないわよ。あんた背が小さいんだし、親父に手を繋いでもらったら？」

「うるさい。背が小さいは余計だ。ハルヒこそ迷子になるなよ」

「あたしはあんたと違って子供じゃなから、平気よ」

精神年齢は、お前より十五歳上だけだな。と、言うわけにもいかずに、俺は黙る。

ん？野球観戦というと、このころにハルヒが面白い出来事を求めるようになるんだっけ。今は2月の下旬だから、あと一ヶ月近く静かになるのか。それはそれで寂しくなるな。

「なあ、ハルヒ。家族やクラスの皆と話すのは楽しいか？」

俺の質問に、ハルヒは笑顔でこう言った。

「当たり前じゃない。あたしのクラスは世界一おもしろいと思ってるし、家族と居るのも楽しいわよ！」

「そうなんだ、ならいいよ…ごちそうさま」

その後、俺は風呂に入って、歯を磨き、ベッドに入った。

あの笑顔もしばらくお預けか…寂しくなるな。

俺はやってきた睡魔に任せて瞼を閉じた。

あれから、ハルヒで言う『普通の日常』を過ごして、迎えた土曜日。

球場までは車で駅まで行って電車で向かった。

試合は夜から始まる。

それまで時間があるので、俺達は近くのデパートで買い物をする事になった。今は婦人服売場にいる。

「これなんか、似合うんじゃない？」

「それもいいわね。でもこれも…」

「俺は男だ！」

「だめよそんなこと言ったら。男の子からモテないわよ？」

「いいんだ！俺は女の子に好かれたいんだ！」

「え、何？あんたってゆ……」

「俺は男だああ！」

俺は母さんとハルヒの着せ替え人形になっていた。

店員さんも、俺が女だと思っているのか「これなんて、どうですか？」と言って服を勧めてくる。

言っても聞きそうにないので、俺は諦めて「俺は男だ。俺は男だ」と早口で唱える。

こうでもしないと、この容姿のせいで、自分でもわからなくなってしまう。

母さんがフリフリの服を取り出したところでそれまで完全に忘れられていた父さんが母さん達を止めて、こう言った。

「そろそろ球場に戻ろう」

ナイスだ父さん！

母さんは気に入った服を会計しに行った。あれはハルヒのでありますように。

球場に戻った俺達はゲートから中に入った。目の前には球場いっぱい人に居て、向こう側の人は米粒みたいに小さい。

ちらつとハルヒの方を見ると、愕然とした様子で立ち尽くしていた。

「…親父。今、この球場には、何人ぐらいの人が居るかわかる？」

「満員だから…五万人ぐらい居るだろうな」

親父の言葉にハルヒはさらに驚いた表情になる。

「ほら、そんな所で立ち止まったら、他の人の迷惑でしょ。ちゃんと歩きなさい」

「…うん」

その後も、ハルヒは何か考え込んでいて、野球なんて見ようとしていなかった。そういう俺も興味はなかったのでボーツとして時間が過ぎるのを待っていたが。

試合も終わり、俺達は来た時と同じく、電車で家に帰った。

家に着くと、ハルヒは部屋に籠ってしまった。電卓で計算をしているのだろう。

一応、声をかけてみる。

「ねえ、ハルヒー。何してるんだ？」

返事なし。

やはり自分が普通の人間だったということに落ち込んでいるのだろうか。

俺がため息を吐いて風呂にでも入ろうと下に降りようとすると、ハルヒの下手の扉が開いた。

「…どうしたの？」

俺が問いかけるとハルヒはうつむいたまま答えた。

「……知ってる？あの野球場にいたたくさんの人達は日本中の人間の2000分の1しかないのよ。あたしは今まで自分が特別な人間だと思ってた。でも現実とは違ってたわ。あたしみたいな人間なんて日本……いえ世界中にありふれた存在なんだってさっき気づいたわ……」

やつぱりそうか。でも俺にはどうにもできない。この話をされた時のキョーンもこんな気分だったのだろう。自分が情けない。

「それだけ……おやすみ」

そう言ってハルヒは部屋に戻った。

「……おやすみ」

俺は風呂に入って、部屋に直行。そのままベッドにダイブし、早めの睡眠を開始した。

女顔と野球（後書き）

感想やアドバイス等々お待ちしております！

ナンパと悪戯（前書き）

4 話目です。

ナンパと悪戯

野球観戦に行ってから、ハルヒは喋らなくなった。それだけではなく、常にイライラしてるように見える。

当然、クラスメイトも不思議に思ったのか、俺に理由を聞いてくる。こいつも例外ではない。

「なあ、ハルちゃん。涼宮さん、何かあったの？」

正直に言えるわけもなく。

「わからない。俺だって知りたいよ」

「そうか…」

悪いな巧。なんだか言っではいけない気がするんだ。

結局ハルヒは、小学校を卒業をするまで、そんな調子だった。

今は春休みなのだが、家でもそんな調子でいるため、父さんや母さんが外につれ出して、元気を出させようとしている。

今日も、ハルヒのためにデパートに来ているのだが、父さんと母さんはハルヒに付きつきりなのだが、俺は無駄だとわかつているので、CDショップで新曲を試聴していた。俺は元々居た世界でも、音楽を聴いていた。

マンガや小説全般も好きだったため、友達から「ハルトって多趣味だね」と言われた事もある。

しかし、この歌手いいな。アルバム買おうかな。

そう思い、俺がアルバムがたくさん売っているコーナーに向かうとすると、なんだか聞き覚えのある声に呼び止められた。

「ねえ君、今暇？だったら俺とお茶しない？」

谷口だ。

なんで、こんな所にいるんだ？

「君、可愛いね。名前はなんていうの？」

小6でナンパって…ていうか、また女と間違えられた。

くそ、なんだろう。腹が立ってきた。そうだ、こいつで発散しよう。

俺はもじもじ（演技）しながら上目使い（演技）で名前（偽名）を名乗った。

「えと、す、涼宮ハルカです…私に何か用ですか？」

谷口が赤くなっている。ふふふ、なんだろう、これ面白いや。

「お、俺は谷口だ。あ、あの、一緒にお茶しませんか？」

谷口のお誘いに、俺はさらにもじもじ（演技）しながら上目使い（演技）で涙目（演技）で、丁重にお断りする。

「えと、あの、す、すいません。私、友達と来てるんで…ごめんなさい」

俺が断ると、谷口はあからさまに残念そうな顔をした。ああ、だめだ。もう耐えられない。

「ぶっ」

「え？」

俺が吹き出すと、谷口は顔を上げてキョトンとしている。

「あはは、マジで引つ掛かってんじゃん。俺は男だよ！」

「はあ！？お前、男だったのかよ！あゝ勿体ねえ！俺的格付けでもAAランク+だったのに！」

AAランク+って最高ランクじゃなかったか？嬉しいくもあるが、非常に悲しい。

「俺の本当の名前は涼宮ハルトだよ。お前は小学生だよな？何年生だ？」

「俺は小6だったよ。新学期から東中に行くんだ」

やっぱり谷口は東中に行くのか。じゃあ、友達になっとくか。そうしたら、キョンとも仲良くなれるかもしれないし。

「お前も東中なのか？じゃあ、俺と一緒にじゃん。友達になろうぜ」
「おう、勿論いいぜ。でも、さっき騙した罪は重いぞ。何か奢ってくれ」

へいへい。

俺は、さっきのアルバムを買って、谷口にコーヒーを奢ってやった。

丁度、父さんから電話がかかってきて、谷口とは、また4月ということで別れた。思ったよりいいやつだったな。

ナンパと悪戯（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

入学と奇行（前書き）

5話です。

入学と奇行

春休みも終わって、今日は入学式。

校長による、睡眠を誘う呪文を聞き流しながら過ごし、今は朝のHRだ。

俺はハルヒと同じクラスになった。ついでに谷口と巧も一緒のクラスだ。

今は教師が自己紹介をさせているのだが、俺は普通に自己紹介し、次はハルヒの順番だ。あの自己紹介をするのかな？

「……。小出身、涼宮ハルヒ。この中に面白いことを知っている人がいたら私のところにきなさい。以上」

そう言って、ハルヒはドカッと座り黒板の辺りを睨み付け始めた。俺はハルヒに話し掛ける。

「何が言いたんだハルヒ」

「うつさい。あんたには関係ないでしょ」

「はいはい、ごめんね」

俺は前に向き直ると、教師に次どうぞと手で示す。本当にごめんなさい。

「なあ、あいつって本当にお前の姉ちゃんなのか？」

谷口が小声で聞いてきた。

午前の授業が終わり、昼休みになると、弁当を持った谷口と巧が寄ってきて、一緒に食べる事になった。てか、巧の雰囲気が変わっ

てる。

「そつだよ。どうかしたのか？」

「どうしたんだろうね、涼宮さん。小学校の頃と全然違うよ」

ちらつと後ろを見える。丁度ハルヒもこちらを見ていて、目があつた。

「…何よ」

「何でも…」

ハルヒは俺のお手製生姜焼き弁当を食べていた。俺が食べてるのも、手作りだ。

何故、俺が作っているかというと母さんが「弁当ぐらい自分で作りなさいよ」と言つて作つてくれないからだ。ハルヒは「あんたが作つといて」と言うので、俺は朝の5時に起きて弁当を作つたのだ。

「お前の弁当つまそうだな。母親が作つたのか？」

谷口が聞いてきた。

「違う。俺が作つたんだよ」

「頑張るね」

本当だよ、まったく。

料理なんて前世界でやつた調理実習以来だつてのに。

「いただき！」

谷口が俺のメインの生姜焼きを取りやがった。メインを取るなよ…

「はあ…うまいか？一応は頑張って作ったんだけど…」

一応、感想を求めている。

「うまい！普通にうまいぞ！作ったのが女じゃないのが勿体ないぐらいだ！」

「声がでかい。あと、一言多いぞ」

谷口が大声を出したため、クラス全体の視線が谷口に向けられる。谷口はちよつと恥ずかしそうに座り直す。アホめ。

「そういえば、ハルトの弁当箱。女の子が使うようなんだけど、どうしたの？」

「ああ、これは母さんが無理矢理『女の子らしくしなさい！』って渡してきたんだよ。ったく、俺は男だって言ってるのにさ」

ちなみに弁当には可愛らしいピンクの兎がたくさんにこやかな笑顔が浮かべている。

俺達は適当に話をしながら弁当を食べ終え、それぞれの席へと戻っていった。

俺はその後、クラスの男子と少し話をしてみたのだが、俺と話をする時、男子が緊張してるのは、何でだろうか。気の弱いやつが多いのかな？

東中に入学してから一周間がたった辺りから、ハルヒが本格的に動き始めた。

教室の窓にお札を張り付けまくったり、教室から全ての机を出したり、全クラスの黒板に謎の絵を描いたり（七夕の練習かな？）して、学校でハルヒを知らない者はいなくなった。

そして、今日もハルヒは謎の行動をした。朝、学校に来ると、全員の机が廊下に出ていたのだが、扉の前に出来ていた人だかりを押し退けて教室の中を覗くと、床に変な魔法陣が描かれており、その中心にハルヒが立って、何かを唱えていた。

「ぶつぶつぶつぶつ…」

正直、物凄く怖かったね。本当に。

このままにしておくわけにもいかず、ハルヒに話しかけようと魔法陣に踏み込むとハルヒのドロップキックで阻止されてしまい、どうしようもなかった。

そこで教師が入ってきて、ハルヒは何回目かわからない生徒指導室に連行されていった。

魔法陣はペンキで描かれていたため、クラス全員でも消すのに一時間かった。

…と、まあこんな感じで奇妙な行動を続けるハルヒは学校中に悪名を轟かせたわけだ。

その、後始末をするハメになる俺の事も考えて欲しいものだね…はあ。

入学と奇行（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

七夕とキヨン（前書き）

6 話目です。

七夕とキヨン

今日は7月7日。七夕だ。

教師が「今日は七夕なので、皆さんはこの短冊にお願い」ことを書いてください」と、くだらんことをいい始めた。

「ハルちゃんは、何を願うんだい？」

「皆が俺を男と認識しますように」

「はは、もう出遅れだよ」

わかってる。そんなこと、わかってるんだよ。でも、少しだけ希望を持ったっていいじゃないか！

「俺はナンパが成功しますように、だ！」

言わなくてもわかるだろうが、今は谷口だ。アホめ。

「僕は勉強が上手くできますようにだよ」

「真面目か」

昔の勉強嫌いだった巧はどこへ消えたんだ。てか、本当に別人じゃないだろうか？

「そうだ、ハルヒはなんて書いたんだ？」

ハルヒはこっちを向いて…

「不思議が寄って来ますように」

…と、言つてそつぽを向いてしまった。

「そうですか…」

俺が前に向き直ると、丁度チャイムが鳴つて、谷口達は慌て自分の席に戻つていった。

その日の授業は何事もなく終了した。

ハルヒは学校から家に帰ってくると、飯を食つてさっさと出ていつてしまった。東中に向かったのだろう。

俺は親にコンビニに行つてくると伝えて家を出た。

携帯で時間を確認する。現在、9時2分。

今、俺は公園でキョンを探しているのだが…

「居ないな…」

まだ、この時間平面にいないのか？いや、もう来てるはずだ。

東中に先回りしとくか。いや、でもハルヒと出会うのは避けたいし…

俺があごに手を当てて考えていると、不意に声をかけられた。

「おい、そこのお嬢ちゃん」

「俺は男だ！」

いきなり、間違えられた俺は怒鳴りながら声の主を見る。って、ええ！？

「すまん、間違えた。それより、東中まで案内してくれないか？」

そこには、朝比奈さんを背負ったキヨンが居た。

…え？東中？ああそうか。校庭の落書きを手伝うんだったね。ご苦労様です。

「こつちだよ、ついて来て」

俺が歩き出すとキヨンがそれに続く。

東中までは距離があるな…そうだ、キヨンで遊ぼう。

「その女の人は？」

俺がそう聞くと、キヨンは一瞬慌ててこう言った。

「こ、この人は俺の姉ちゃんで、突発性居眠病にかかってるんだ」

「ふん。じゃあ、どうして家じゃなくて、東中に行くんだ？」

「え、え、それはだな…」

キヨンが黙り混んだ。楽しいな。もしかして、俺はDSなのか？

「まあいいや。ところで変な北高生さん。あれが東中だよ」

俺はちよつとだけ見えている校舎を指差して言う。

「ありがとな、ハルト。助かったよ」

「どういたしまして。ところで、俺って名前、教えてたっけ」

キヨンがしまったという表情になる。おゝい顔に出てるぞ。

「じゃあ、俺は帰る。また、三年後な」

そう言って俺はダッシュでその場を離れる。後ろでキョンが叫んでいたが振り向かなかった。

その後、家に帰った俺が部屋に行こうとすると母親に呼び止められた。

多分説教だろうとため息を吐いて母さんの前に正座する。

「どれだけ遠いコンビニまで行っただの！女の子がこんな時間に出歩いちゃいけません！」

はあ、まったくどいつもこいつも…

「俺は男だあ！」

どうやら、俺の彦星宛の願いは届かなかったようだ。

七々とキヨン（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

夏休みと宇宙人（前書き）

7話です！

夏休みと宇宙人

七夕以来ハルヒはジョンを探すために北高に行くようになった。当然今のキヨンは中学生なので見つかるわけなく、ハルヒはいつも以上にイライラしている。

背中に不機嫌オーラを受け続け、迎えた夏休みの半分が終わったぐらいだった。

今日は谷口達と遊ぶ予定も無かったので駅前のCDショップや本屋をぶらぶらしていた。

…あ、この前読んだ小説の続編発見。続きが気になってたし、買おうかな。あれ？この前もこんな展開があったような気がする。

俺が本を手に取り、レジに向かうとすると、案の定誰かに呼び止められた。

「ちょっといいかな？」

誰だ？この声に聞き覚えはないけど…

俺が声のした方向に振り返ると、そこには谷口的格付けで最高ランクのAAランク+の美少女で情報統合思念体の対有機生命体コンタクト・インターフェース、朝倉涼子がいた。

俺は体をビクツと震わせて固まってしまった。目の前に殺人鬼が立ってるんだ、仕方ないだろ。

そんな俺の様子に朝倉は首を傾けてこう言った。

「どうしてそんなに緊張してるの？ちょっと聞きたいことがあっただけなのに…」

俺は冷静さを取り戻して、尋ねる。

「えと、聞きたいことって何ですか？」

朝倉は顔を上げて笑顔を浮かべた。その笑顔は十人中八人が惚れそうな笑顔だったが、あいにく俺はこいつの正体を知ってるので、ビクツとしてしまう。

朝倉は笑顔のまま目的を伝えてきた。

「SF小説のコーナーってどこかわかる？友達に読書が大好きな女の子がいるんだけど、家から出ようとしなの。困った子よね」

ああ、長門さんか。

家から出ようとしなののは、キヨンと朝比奈さんから目が離せないからだろう。ご苦労様です。

さて、どうしよう。

この本屋は複雑な造りをしているから、言葉で伝わるとは思えないし。

…はあ、仕方ない。

「案内しますよ。ついてきてください」

「ありがとう、助かるわ」

朝倉は笑顔のまま俺についてくる。

一般人を後ろから刺し殺すことはしないだろうし安心していいのだろうか。

あ、俺ハルヒの弟だ。ということは俺が男って知ってるのか？

…ちよつと探りをいれてみるか。

「あの、俺って男か女のどっちに見えます？」

朝倉は不思議そうな顔でこう言った。

「え？男の子じゃないの？」

やっぱり俺を知ってるのか。それとも偶然だったりする？

「へえー、初対面で男って言われたの初めてです。もしかすると俺のこと知ってました？」

俺がそう言っていると朝倉はしまった、という表情になる。確定した。俺は目をつけられてる。

気づくとSFコーナーに着いていた。

「着きましたよ、それじゃ俺は帰りますね」

俺が立ち去ろうとすると、朝倉に呼び止められた。

「あ、ちょっと待って。私のマンションに来ない？お礼に何かご馳走するわ」

朝倉はそう言っていると返事も聞かずに目的の本を探し始めた。

お礼と言われてもな…

携帯で時間を確認する。5時43分。

「…親に連絡入れないと」

俺は電話帳から家の番号を液晶に表示して発信ボタンを押す。少しのコールの後母さんが出た。

「はい、もしもし涼宮です」

「あ、母さん。俺、ハルトだよ。友達の家で夕飯をご馳走になることになったから帰りも遅くなるかも」
「そう、わかったわ。でも女のk…」

母さんがいい終える前に電話を切ってやった。あと、俺は男だ。
俺が携帯をポケットにしまつと朝倉が戻ってきた。

「ごめんごめん。じゃあ行こっか」

そう言つと手にハードカバーのSF小説を持ってレジに向かつて歩き出した。俺が持っている本もレジを通っていないことを思いだし、会計に向かった。

「ここよ、私は505号室に住んでるの」

俺は朝倉に連れられ長門が住んでいるマンションに来ている。朝倉も住んでるけど。

「708号室に寄らせてくれない？この小説を渡さないといけないから」

「あ、はい。別にいいですよ」

朝倉はオートロックを解除して中に入っていった。俺もそれに続く。

「あの、名前聞いてもいいですか？」

知ってはいるが念のためだ。

「そうだっけ？私は朝倉涼子。あと、その敬語やめてくれないかな。ちよっと話しくいし」

「…わかった。よろしく、朝倉」

「うん、よろしくねハルト君」

「着いたわ。ここに読書好きの女の子が住んでるの。無口な子だけど気を悪くしないでね」

朝倉がそう言ってインターホンを鳴らす。少しして扉が開いた。

「はい、これ約束の本。あと、この人は涼宮ハルト君。私がSFのコーナーに行けなくて困っているところを助けてもらったの。ちよっとお邪魔していいかしら？」

長門は感情の色が感じられない液体ヘリウムの目で俺を見つめてきた。ちよっと怖い。

「ど、どうも…」

俺の挨拶に反応することなく、何度か瞬きををして長門は「…入って」と、言っただけで中へと消えていった。

「お邪魔します…」

部屋に入って周りを見渡してみる。

これで本当に生活できてるのかな？というぐらいに家具が少ない。俺は机についてあぐらで座る。よく母さんがあぐらを批判する意味がわかる気もするが、認めたくない。

「台所借りるね」

そう言って朝倉がパタパタと台所に入っていく。おでんがいいな、朝倉が作ったのを一回食ってみたい。

俺が素直にそう思って台所をぼーっと見ていると、長門が何か呟いた。

長門を見ると本から顔を上げて俺を見つめていた。

「へ？」

俺は間抜けな声で聞き返す。

「名前」

名前？何が。

「えと…」

長門は俺を指差して。

「あなたの名前」

と言った。

「え？ああ、俺の名前ね」

もうちょいわかりやすく言ってくれないもんかな。

「俺は涼宮ハルト。君は？」

聞く必要もないが、怪しまれないためにもな。

「長門有希」

それだけ言って長門は再び本に目を落とす。

長門はさっき朝倉が買ってきた分厚いハードカバーを読んでいるのだが、読むスピードが以上に早い。まだ読みはじめて30分位のはずだが、すでに6分の1ぐらいいは読んでいる。そんなので内容は頭に入ってくるのか？

そんなことを思いながら長門の手の動きをなんとなく見ていると台所から大きな鍋を持った朝倉が出てきた。

「お待たせ、冷蔵庫に入ってた食材で作ったから、おいしくなかったらごめんね」

鍋の中身はおでんだった。いや、普通にうまそうだよ、朝倉さん。俺は朝倉から箸と皿を受け取って「いただきます」と言って大根を取って一口かじる。

「どう、おいしい？」

朝倉が笑顔で感想を求めてくる。

「おいしいよ、朝倉って料理が上手なんだね」

朝倉は笑顔のまま「ありがとう」と言って食べ始める。

長門は機械的な動きでおでんを胃袋に放り込んでいく。こら、ちゃんと味わって食べるよ。

「ハルト君。あなたって兄弟とかいるの？」

朝倉が聞いてきた。別に言わなくても知ってるでしょうが。と言えるわけもなく普通に答える。

「同い年の姉がいる。といっても義理の姉だけだね」

「ふん。お姉さんの名前は何て言うの？」

義理の姉ってところはスルーかよ。…まあいいや。

「漢字じゃなくて片仮名でハルヒ」

その名前を聞いた朝倉は何か考えた後、こう聞いてきた。

「じゃあ、そのハルヒさんはどんな子なの？」

ここでハルヒの力のことを言ったら、俺は確実に危険人物リストにのるな。それは避けたいし言わないほうがいいな。

俺はできるだけ悟られないようにこう言う。

「変人としが言い様がない」

俺の答えに朝倉は期待はずれだという表情をして、考え込んでいる。

俺は安心してため息を吐いて昆布をとって口に運ぶ。味が染みててうまい。情報統合思念体の手先じゃなければ俺は惚れていたかもね。

突然いつの間にか箸を置いている長門がこうやってきた。

それは俺にとってまったく嬉しくないことだった。

「…あなたは何か隠している」

長門：お前は俺の心でも読めるのか？

夏休みと宇宙人（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

記憶と約束（前書き）

どうもフクヤンです。

今回はハルトの異世界人としての設定を書いたのですが、物凄く無理矢理な感じが…

基本的に未来人の設定が異世界人版に改造されたようなもので、これが精一杯なんです。

とにかく8話です！

記憶と約束

さあ、どうしようか。

一応、能力はスイッチをONにして発動中だけど…

ちなみにずっと紹介しようとして忘れていたのだが俺の能力についてだ。

俺の能力にはスイッチが無形で存在していてそれをONにすることで初めて能力が発動できるのだ。

ちなみにハルヒの不機嫌が伝わって、こっちまで気が滅入るので、普段はOFFにしている。

話を戻すけど長門に隠し事をしているのがバレただけど…一応しらばっくれてみよう。

「なんのこと？俺は別に隠し事なんか…」

「あなたは涼宮ハルヒについて話した後、嘘がばれなかったことに安心し、リラックスした」

あのため息がいけなかったのか…迂闊だったな。

「本当のことを話して」

本当のことを話せと言われても「俺実は転生してきた異世界人なんだ！」というわけにはいかないし…あれを話すしかないか。

あれというのは転生したあとに、何故か記憶の中に知らないものが存在していたのだ。その内容は自分が異世界人であるという証拠だった。ありがとう神様。

まあとりあえず。

「わかった。本当のことを話すよ」

俺がそう言うと朝倉と長門が真剣な表情になる。

「一言で言うと俺は平行世界^{パラレルワールド}からきた異世界^{いせかいじん}人だ。

俺の元々居た世界では世界と世界の間を移動できる技術が存在しているんだ。

その技術は一部の人間にしか扱えないんだけど、俺は扱える人間の一人だった。

俺はそういう人間で構成された組織に所属していたんだ。

こつちの世界に来たのは上の命令で調査を任されていたからで、特に問題なく進んでいた。

しかし今年の初めに状況は一変した。

俺達が異世界^{いせかいかんいどう}間移動をすると時空震動^{じくうしんどう}と呼ばれる空間の震えが発生するんだ。

でも、それはとても小規模なものであり世界にはなんの影響はなかった。

しかし今年の初めに、ある少女を中心にそれとは比べ物にならないほどの大規模な時空震動^{じくうしんどう}が起きた。

その影響で世界間に時空断層^{じくうだんそう}が作られこの世界は他の世界から完全に隔離^{かくり}されてしまった。

つまり、向こうからもこの世界に侵入できないし、俺も元の世界に帰れなくなった…これが俺の知っている全てだ」

話し終えた俺は冷えきって、味の落ちたおでんを口に入れる。

自分で話していて気づいたんだけど、この話って未来人と変わらなくないか？

俺が神様が手抜きしたことに不快な気分になっていると、あることを思い出した。

「君達も何か隠し事してない？」

俺は朝倉からも長門からも情報統合思念体じょうほうとうごうしねんたいの話を聞いていない。

「そうね。我々のことも話さないと不公平よね」

朝倉はそう言って情報統合思念体について話し始めた。

「…というわけ。理解出来た？」

朝倉は話し終わるとそう言った。

元々知ってたから理解出来ないわけがないんだけどね。

それに、もうひとつ情報統合思念体について知っている理由もあるし。

「俺の世界にも情報統合思念体は存在していたから、元々知ってたよ」

俺も初めて記憶の中を覗いて驚いたのだが、俺の世界にも情報統合思念体が存在していたのだ。

この世界の情報統合思念体とは完全に別物でこっちの情報統合思念体は俺の世界の情報統合思念体の存在を知りもしない……という設定だ。

俺の衝撃発言に朝倉は驚愕の表情を浮かべる。長門はよくわからない。

「へえ、それは驚きね。是非紹介してほしいわ」

「無理だね。さっきも言っただけ、あっち世界からもこっちの世界からも通信が途絶えているんだから」

「そう…残念」

今は朝倉。

俺の異世界人能力も向こうの情報統合思念体にナノマシンを注入してもらったからで、俺が一般人として生活してるのも向こうの情報統合思念体の情報操作のおかげ……という設定だし。

「ところで思念体に頼みがあるんだけど」

俺がそう言っていると朝倉は不思議そうな表情を浮かべた。

頼みというのは俺を機関きかんやらその他のハルヒに興味津々な勢力から保護してほしいというものだ。情報統合思念体に勝てる人間がいるとは思えないしね。

俺はその事を伝える。

「わかったわ、後で申請しとくね」

「ありがとう。助かるよ」

「でもそれには条件があるわ」

条件？ いったい俺に何を求めるんだ？

「あなたが涼宮ハルヒについて知っていることをすべて教えてくれない？」

俺が知ってるのなんてたかが知れてるけど、それだけでいいなら。

「うん、いいよ。でもあまり期待しないでね」

その後、俺達は三人で情報を交換した。向こうが知ってることの方が圧倒的に多かったけど、一応俺しか知らないこともあった。

その後、話が一段落ついたところで朝倉にもう11時45分だということ^{ひとだんらく}を告げられたため、俺は慌ててマンションを飛び出し帰路についている。

携帯で時間を確認する。0時10分。

これは帰ったらこってり絞られるなと思い微苦笑^{ひくしょう}して携帯をしまった。

記憶と約束（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

牛乳と油断（前書き）

すいません、短いです。
では、どうぞ！

牛乳と油断

8月24日。夏休みも終盤に入り、セミ達のラブコールもピークに達しつつある。

そんな日の朝、俺は絶望した。

「…ない。牛乳がない」

牛乳がなくなっていたのだ。

俺にとっては物凄く大事なことなんだぞ？少しでも背を高くして男らしく見せるためなんだ。まだこの努力は報われていないんだけどね。

そんな俺の『男らしくなろう計画』の重要なものがなくなっている。

母さん買ってきてなかったのかな。

「母さん。牛乳がないよー！」

母さんから返事が返ってこない。

「？…あ、そうか」

今日は母さんの友人の結婚式で、昨日から居なかったんだ。牛乳がないのも当然だ。

「ハルヒー。起きてる〜？」

返事はない。あいつも居ないのか。

「…仕方ないか」

もう自分で買いに行くしかない。

俺は適当に服を着替えて家を出た。

俺は近所のコンビニに向かっている。朝が早いから人通りも少ない。

それにしても

「暑い…」

どうして朝なのに暑いんだ？太陽ももう少し遠慮をしてくれないかな。

そんなことを考えていると、コンビニが見えてきた。さつさと入ってクーラーにあたりたい。

俺は早足でコンビニの自動ドアに向かい、中に入る。

「ふう……さつさと買って帰ろう」

俺は飲み物コーナーに向かい、牛乳と水を手に取る。

水を手に取ったのはジュースは甘ったるいし、炭酸は飲むと喉が痛くなるから嫌いなんだ。

俺はレジに向かう。今日は女性店員が、よかった。別にやましい意味ではないよ。

会計を済ませ扉に向かう。

「ありがとうございました」

店員のマニュアル通りの言葉を背に受け外に出ると、強烈な熱気

が俺を襲う。

「暑っ」

俺はさっそく袋から水の入ったペットボトルを取りだして一口飲む。冷たくておいしい。

俺は水を戻し歩きだそうとするが、男の声に呼び止められた。なんだよ、早く帰らせてよ。

「お嬢ちゃん、道を教えてくれないかな」

振り向くと黒いスーツを着た、変なおっさんが居た。暑くないの？こっちが暑くなってくる。

「はい、いいですよ」

最近、女に間違われても訂正するのが面倒になってきた。30分はかかるから。

「ありがとう、ここなんだけど…」

男はポケットから一枚の紙を取り出した。多分、住所か何かが書いてあるんだろう。

俺は男に手招きされたので近づいていく。しかしここで油断した。後ろから何かで殴られたのだ。

「…っ!？」

これは…もしかして誘拐か？

俺が最後に見たのは男二人の嫌な笑みだった。

牛乳と油断（後書き）

感想、アドバイスをください！お願いします！

倉庫と古泉（前書き）

前回の続きです。

倉庫と古泉

気がつくと周りはコンテナが積み上げられている場所で椅子に縛り付けられていた。

「ここは…？コンテナがあるから倉庫か…」

殴られた後頭部がまだ痛む。なんだよ、誘拐にしては手荒じゃないか。

というか、牛乳は！？せっかく買ったのに！

俺が呑気にそんなことを考えていると、倉庫の奥の方から、さっきの男が出てきた。さっきはよくもやってくれたな、このやろつ。

「起きたかお嬢ちゃん。よく眠ってたじゃないか」

「うつさい。あと、ついでに言うておくが、俺は女じゃなくて男だよ。覚えとけ」

「そんなことはどうでもいい。聞きたいことがある」

どうでもいいって何だよ…俺には重要なことなんだ…

俺が男の無神経な言葉にブルーになっっていたが、男は無視して続けた。

「お前はTFEI端末と接触していたな。なにが聞いていないか」

TFEI端末？

ああ、長門や朝倉のことか。

長門達のことを知ってるということは、機関の関係者だろうか。

「なんのことですか？」

「とぼけるな。お前のことは常に監視しているんだ」

なるほどね…でも話した内容はわからない筈だよね？

「だからなんのことですか…」

「いいから吐け！殺されたいか！」

男はそう言うと、ポケットから拳銃をとりだした。ちゃんと仕事してくれよな警察さん。

でも、あれが本物だとしたら、非常にまずいな。俺はまだ死にたくないのだけど。

もう話すしかないな。

そう思い、口を開こうとすると外から連続した銃声が聞こえてきた。マシンガンかな？

「ちっ…もう見つかったか…」

そう呟くと男はイライラした様子で奥へと消えていった。

主流派が来てくれたのだろうか。だとしたら助かったな。今回は本当にピンチだった。

俺が椅子に縛られていることを思いだし、流れ弾が飛んでこないことを祈っていると、奥から誰かが近づいてきた。

助かりました、主流派の方々。

しかしその人物は予想外の人物だった。

「…えっ!？」

肩まで伸びた髪と、液体ヘリウムのように感情の色が見えない目の少女。

長門だった。

「ごめんなさい。これは、我々が監視を怠ったために起こった事態」
「へ？」

「あなたとの契約を守れなかった」

契約？

俺は記憶を引っ張り出す。ああ、俺が話す代わりに俺を襲ってくる奴等から守ってくれってやつか。

「いや、いいよ。俺が油断したのもあるし」

「そう」

「……」

「……」

「…あのさ、これ解いてくれないかな」

「わかった」

長門は高速で呪文を唱え始める。

長門の口が止まると俺を縛っていたロープが光の粒になって消えていった。これが宇宙的インチキマジックか。

「ありがとう。助かったよ」

「いい」

俺が椅子から立ち上がり、長門に近づこうとすると、急に長門が後ろを向いて右手を振り上げた。

すると、連続した銃声が聞こえてきて、長門の前で見えない壁に弾かれる。

「うわっ！」

「私の後ろに」

俺は長門の言われるがままに後ろにまわる。ほどなくして、また銃声が響き、見えない壁に弾かれる。

「あ、ありがとう」
「いい」

長門はもう左手を前にかざして呪文を唱え始める。
その間も敵からの銃撃は続いたが見えない壁に弾かれて長門の体には届かない。

長門の呪文が止まると、扉の方から悲鳴が聞こえてきた。それから銃撃はなくなった。

「もう大丈夫」

俺が長門に感謝の言葉を言おうとするが、数人が武装した状態で走ってきたため、長門の後ろに隠れる。

「長門さん！大丈夫ですか！？」
「平気」

どうやら味方のようなだった。というか、この声は…

「彼は無事ですか？」
「私の後ろ」

俺は長門の肩越しに男の姿を確認する。

「僕達は敵じゃありませんよ。安心してください」

やっぱり古泉こいずみだった。俺はむかつくインチキスマイルを睨みつける。

「どうしました？僕の顔に何かついてます？」

「うるさい、ちゃんと強硬派の監視してるのか？俺、殺されかけたよ」

俺がそう言うとき古泉は何か驚いているようだ。どうしたんだ？

「どうしたの？」

「いえ、どうしてあなたが機関のことを知っているのかと思いました。長門さんが彼に教えたんですか？」

長門は首を横に振る。

「それでは……」

「私ではなく、朝倉涼子が彼に教えた」

ややこしい言い方だな。

そうだ。俺はこの間、長門のマンションに行った時に機関のことを話してもらっていた。

だから、遠慮なく言わせてもらったのだ。

「ただし、派閥のことは教えていない」

…え？

「では彼も訳ありの人物ということですか」

ミスった… やっちゃったよ…

「……」

俺が視線を感じてそちらを向くと長門が「話していい？」と目で聞いてきていた。なんとなくわかった。

俺は小さく頷く。仕方ない、古泉には話すつもりだったし、別に構わないか。

俺が許可を出すと、長門が口を開いた。

「彼は異世界人」

長門の必要最低限の言葉に古泉は、これは驚いた！という表情で俺に目を向ける。

「それはそれは…やはり涼宮ハルヒ関連ですか…よければ事情を教えてくださいませんか？」

俺は頷くと、長門達に話したこちらの世界での設定を説明した。古泉が何度か質問をしてきたが、答えられる範囲で答えた。あらかた質問を終えたのか、少し考え込むと、「納得しました」といってインチキスマイルを向けてきた。

「そういうことならば我々と協力しませんか？」

「俺は異世界の組織との交信が途絶えてるから力になれないと思うよ」

俺がそう言うと古泉はふふつと笑ってこう言った。

「機関とあなた個人でなら問題ないでしょう？あなたは我々が24時間態勢でま護ります」

それは協力というより、俺が護ってもらっただけじゃないかな？

「わかった。協力するよ」

「よろしく願います」

古泉が握手を求めてきたので、それに俺は答える。

「では、あなたを家まで送ります」

「いいの？ありがとね」

「長門さんはどうします？」

「いい」

「了解しました。では行きましょう」

古泉はそういつと倉庫から出ていった。俺もそれについていく。

「長門！今日はありがとね！」

長門が何か呟いたようだ。多分「いい」とか「約束だから」とかだろう。

外にでると、もう辺りは薄暗くなっていた。俺はどれだけ眠っていたんだろうか。

「この車に乗ってください」

古泉が示したのはハルヒのアニメで出てきたタクシーだった。

俺がタクシーの後部座席に乗ると古泉は俺の隣に座った。運転席には荒川さんっぽい人が乗っていた。

「ええと、家は……」

俺は家の場所に案内しようと思ったが、古泉がそれを妨害した。

「大丈夫です。あなたのお宅は知っています。涼宮さんの家でもありますからね」

そつえばそうだったな。

俺は家までの時間を古泉と適当に話ながら潰し、家の前でタクシ
ーを降した。

「では、またいつかお会いしましょう」

「またね」

古泉を乗せたタクシーはどこかに走り去っていった。
ここで俺はあることに気づく。

「あ、牛乳…」

また古泉にでも請求するか。

俺は牛乳がないことに悲しみながら家に入った。

倉庫と古泉（後書き）

感想をください！お願いします！

新学期と弁当 1 (前書き)

すいません、間に合いませんでした…

とりあえず、書けているところまで投稿します。

この話は3DSからの投稿なので、5000文字が限界なので短めです。

新学期と弁当 1

あれだけ元気に鳴いていたセミの声も聞こえなくなって、長いはずの夏休みも終わり、9月1日。始業式の日だ。

あの古泉と出会った日から今日まで平和な日々が過ぎていった。ところが俺は不思議に思うことがあった。

宇宙人、超能力者ときたら、未来人である朝比奈さんが来るとおもっていたのだが、結局なにもなかった。長門や古泉と出会ったのは偶然だったのか？

「えー、皆さんは……」

とにかく今は学校行事恒例の校長の無駄話が始まったところだ。

ああ…もう眠くなってきた……

俺は夢を見ていた。

なんと俺の外見が普通の男になっていたのだ！夢から覚めたくない…

「ほら、起きなさい」

うるさい！俺はこの男らしい体で生きていくんだ！

「なに寝ぼけてるのよ！殴りたいの！？」

いや、痛いのは嫌だ…

「じゃあさっさと起きなさい！」

突然、俺の頬に強い衝撃を受けた。なんだよ結局殴ってんじゃん。それにより俺の意識は完全に覚醒して、周りの状況を知る。

俺を殴ったのはハルヒか…もう少し優しく起こしてよ…

「ん？始業式は？」

さっきまで聞こえていた校長の低くて渋い声が聞こえない。でも、その代わりに生徒の声が聞こえてくる。

「もう始業式は終わってるわよ！退場になってもあんたが寝てるからあたし達が退場できなかったの！」

「え！？」

辺りを見渡すと、俺のクラスの生徒全員の視線が俺に突き刺さっている。早くしやがれ、という意味を込めた視線だ。

「ほら、さっさと立ちなさい！姉のあたしが恥ずかしいわよ！」

俺はハルヒに腕を捕まれ、無理矢理立たされる。

「う、うん。ごめん」

俺は恥ずかしい思いをしながら体育館を後にした。

体育館を出てすぐの渡り廊下に出ると、巧と谷口がニヤニヤと気持ちの悪い笑顔で近寄ってきた。巧はいつも通りの顔だけどね。

「よく寝てたね。そんなに疲れたの？夜はしっかり寝ないと体に悪いよ？」

「……そうですよ。」

「昨日ハルヒの部屋から奇妙な音がして、眠れなかったんだ。ハルヒのことだ、また何か企んでるんだろうね」

昨日は夜中の3時ぐらいまで奇妙な音がしていた。何をするつも

りなのだろうか。

俺を叩き起こして退場が終わるとどこかに走り去っていった。まあ、どうせろくでもないことだろうけど。

「二学期の初日からかよ。まったく、毎回巻き込まれる俺達の身にもなれっつての。今度はなんだ？黒板に藁人形でも打ち付けるのか？」

ハルヒのことだから違うとは言い切れないのが怖い。

「とにかく心の準備をしたほうがいいね。涼宮さんは何をしでかすかわからないし」

「そうだね」

俺は転生というイベントをこなしているから大抵のことは冷静にしていられる自信があるけどね。

しかし俺を待っていたのは、これまでにないくらい気味の悪いことだった。

「なんだよ、何にもないじゃなねえか。せつかく心の準備までしてたのによ」

そう、教室に戻った俺が見たのは、何も変化していない教室の自分の席で静かに座っているハルヒだけだった。

「は、ハルヒ……」

ハルヒは不機嫌そうにこっちに向いた。

「何よ」

いや、その……

「……今日は何もしないの？」

俺は本気で怯えていた。だってあのハルヒがダッシュで教室に戻った日は必ず俺達にとってよくない出来事が待っているのだ。

「はあ？あたしが何かしないとおかしいわけ？」

ハルヒは有名刀鍛冶が仕上げた日本刀のような鋭い睨みを俺に向ける。

「いや、別にそういうわけじゃないけど……」

まあ、おかしいんだけど、ハルヒの前で言ったら俺の人生は終わってしまう。

俺が黙るとハルヒはため息を吐いてこう言った。

「実は昨日の夜徹夜して作った道具を忘れてきたのよ。朝のあたしが憎いわ」

ああ、なるほどね。

「ふう、一安心だね。でも何をするつもりだったんだろうね」

「どうせ俺達にとって不幸にしかならねえよ。涼宮はそういうやつだ」

谷口が言った。お前ってやつは……俺が目の前にいることを忘れてないかな？まあ、いいけどね。

俺は谷口と巧に、また次の休み時間にも話そう、と言って自分の席に座って机に突っ伏す。まだ眠いんだ、しょうがないじゃん。

「あんたまた寝るつもりなの？いい加減にしないと教師に叱られる

わよ」

後ろからハルヒが言った。

誰のせいだと思ってるんだ。まったく、俺の睡眠時間を返せよ。

「今日は転校生も来るのよ。さすがに起きてないと失礼じゃない」

どの口が言ってるんだ。ハルヒの普段の行動からは想像できない言葉だよ。

「…ん？ハルヒ、今転校生って言った？」

俺がそう言っていると、ハルヒは呆れたという表情で俺の疑問に答えた。

「あんた校長の話聞いてなかったの？」

「寝てたからね」

「知ってるわよ、そんなこと」

「じゃあ言うなよ。」

「とにかく、このクラスに転校生が来るのよ。確か『細川』っていう名字だったわね」

え？

「ごめん、もう一回言ってくれないかな」

「細川よ細川！あんた頭だけじゃなくて耳まで悪くなっちゃったの？」

だからお前に言われたくない。

「とにかく転校生が来るんだから、ちゃんと起きてなさい。その子に失礼じゃない」

「わかった。善処するよ」

俺は前に向き直ると、ハルヒが言った転校生の名字について考える。

細川って俺がハルヒの家の養子に入る前の名前だよね。これは偶然？

もし偶然じゃないとしたら…

「…俺の双子？」

そういうことになるな。

じゃあ、感動の再開ということになるのかな？

俺が今日やってくる転校生について考えていると、教室の扉が開いて教師が入ってきた。もうそんな時間？

時計を見てみると、チャイムが鳴るまで一分を切っていた。

俺は考えるのを放棄して扉のほうを見る。

扉のガラスから頭のおでこあたりまで見えていた。ということは俺と同じぐらいかな？

…俺がちっちゃいと言ったバカ野郎は今すぐ俺のところまで来い！俺だって頑張ってるんだ！

「おはよう、皆さん。校長先生が話をされたので知ってると思いますが、今日は我がクラスに転校生を迎え入れることになりました」

女教師がそう言うクラスから歓声上がる。俺は名字のこともあつて緊張しているけどね。

女教師はクラスの生徒が静かになったのを確認すると、廊下にいるであろう転校生に入ってくるよう声をかけた。

扉が開いて転校生が入ってくる。そこでクラスは一気に静かになった。俺も絶句している。

だつて…

「驚いた？私も初めて会った時はびっくりしたわよ。この子は『そかわあきは細川秋葉』さん。そこにいるハルト君の妹さんよ」

俺と瓜二つの美少女がいたのだから。驚かないほうがおかしいだろう。

俺の妹らしい美少女が絶句している俺に向かって微笑んでこう言った。

「初めましてお兄ちゃん。私達が産まれた日以来だね」

生きてたのか…よかった。

妹の微笑みに、俺は苦笑いを返す。

妹の言う通り、俺と妹は初対面なのだけど、俺にとって唯一血の繋がった妹だ。死んでいたらそれなりにショックだったと思う。

「じゃあ、細川さんは空いてる席に座ってくれる？お兄さんの近くじゃなくてごめんね」

妹は「大丈夫です」と言っただけで俺の席までやってきた。

「これからよろしくね、お兄ちゃん」

そう言っただけで妹は俺に微笑んでくる。

「え」と…

なんて呼ばうか迷う俺。実の妹と言っても初対面の女の子だ。呼び捨て気が引ける。

「秋葉でいいよ」

察してくれたようだ。ありがとう、助かる。

「じゃあ、秋葉。よろしくね」

俺も微笑む。今度は本当の笑顔だ。

俺に挨拶を済ませると妹はハルヒの席に近づく。

「よろしく、お姉ちゃん…になるのかな？」

ああ、そうか。秋葉にとってもハルヒは姉ということになるのか。

「…気安くお姉ちゃんなんて呼ぶんじゃないわよ」

やっぱりそうなるんだ。もう少し素直になれよ。お姉ちゃんって呼ばれて顔が赤くなってるぞ。

妹もそれに気づいているのか、微笑んで自分の席に向かった。場所が廊下側の最後尾だ。

俺は後ろに振り返り、ハルヒに話しかける。

「ハルヒ、無理しなくていいよ。顔が赤くなってる」

俺が指摘するとハルヒはさらに顔を真っ赤に染めて否定の言葉を並べ始めた。ハルヒって思ったより、顔に出るタイプなんだね。

ハルヒは女教師になだめられて静かになった。

「じゃあ、朝のHRはこれで終わりよ。みんな次の授業の準備を忘れないようにね」

そう言って女教師は教室を出ていった。次の授業の国語はあの女教師の担当だからすぐ戻ってくるだろうけど。

でも、こんな形で妹と出会えるとは思わなかったな。

俺が次の授業の準備をしていると、秋葉が話しかけてきた。気配を消して近寄るんじゃない。

「ねえ、お兄ちゃん。お昼一緒に食べようね」

「え？あ、うん。いいよ」

兄妹だから当たり前か。ハルヒは「一人で食べれば？」と言われているので、不可能だけどね。

あ、そうだ。

「谷口と巧も一緒だけいいかな。嫌なら断っておくけど」

巧達とはいつも一緒に食べてるからね。

「私はいいよ。お兄ちゃんの友達ともお話してみたいしね」

そう言っただけ秋葉は微笑んだ。普通に性格がいい。しばらく男子からの告白ラッシュが続くだろうな。まず、谷口あたりが玉砕されるだろう。

「じゃあ、また昼休みね」

そう言っただけ秋葉は自分の席に戻って授業の準備を始めた。

「あんたの妹とは思えないほど素直ね。あんたもあの子を見習いなさい」

ハルヒがそう言った。

お前の妹でもあるんだぞ。それに俺は素直だ、多分。

「うるさい。ハルヒも秋葉を見習えば？顔はいいんだし、性格をどうにかすればモテると思うよ」

俺がそう言うと、ハルヒは顔を怒り一色に染めて怒鳴った。

「うっさいわね！あたしは別にこのままでいいの！あんたみたいなチビに言われたくないわよ！」

ああ？

「お前、今チビって言ったな！？ふざけるなよ！俺だって毎日牛乳を飲んで頑張ってるんだ！俺より背が高いからって調子に乗るな！」
俺は本気の涙目で言う。

クラスメイトの視線に哀れみが混じっているのは気のせいかな。
気のせいであってくれないと、俺が惨めになってくる。

「なによ！だいたいあんたは……」

その後、俺とハルヒのケンカはチャイムが鳴って先生が入ってくるまで続いた。すごく恥ずかしかった。

授業は普通に受けている。だって担任の授業で寝るのはさ、なんだか気まずいしね。

授業終わり、俺は巧と谷口に弁当は妹も一緒にいいか確認をする。
この二人が断るはずがないけど、一応確認だ。

「いや、お前と友達でよかったぜ！美少女転校生と弁当を一緒に食えるなんて、夢みたいだぜ！」

「弁当は人数が多いほうがいいからね。僕は別にいいよ」

やっぱり。

谷口はともかく、巧はいいやつだからね。
というか谷口よ。

「目の前に兄がいることを忘れないようにね」

今日に会ったばかりだけど、兄として谷口は絶対に駄目だ。

「そんなこと言うなよ」

なんと言おうが、お前は駄目だ。絶対に。

この後も谷口がチャイムが鳴るまで何か言っていた。俺は聞こうともしなかったからわかんないけど。

その後の授業は、教師の説明は耳を素通りさせた。一度習っているのに聞く意味がないからね。よく谷口あたりから文句を言われるけど。

教師が執拗に難しい問題を解かせようとするが、俺は見事にかわし、午前の授業をクリアした。

俺はカバンから弁当を2つ取り出して、片方をハルヒに渡す。

「はい、ハルヒ。お弁当だよ」

「ありがと」

ハルヒの食欲は異常なので、弁当は三段作らされている。俺は少食だから一段だ。

俺は席を立って、秋葉の席に向かう。秋葉は弁当は自分で作っているのかな。

「あ、お兄ちゃん。ちょっと待ってね」

秋葉はカバンからピンク色の女の子らしい弁当箱を取り出した。

「それ、お兄ちゃんの手作りなの？」

「ふえ？」

突然の質問に変な声を出してしまう。かなり恥ずかしい。

俺は秋葉の質問を思い出して、答える。

「うん、弁当は自分で作れって母さ…今の母さんがうるさくてさ。ハルヒの分まで作らせてるんだ」

新学期と弁当 1（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております！

新学期と弁当 2（前書き）

すいません…遅れました。

言い訳をすると部活の大会やらテストやらで忙しく、なかなか投稿することができませんでした。

今回は前回の続きです。短い上に中途半端に終わっています。

新学期と弁当 2

秋葉はふうん、と言って弁当を見つめる。

「自分で作ってるんだ。女の子だったらモテるかもしれないね」
俺は男d…え？

「お、俺を男と認識してくれてるの!？」

女の子だったら、と言ったことわ今はいい。

秋葉は不思議そうな顔をしてこう言った。

「え？だって、それ男子の制服でしょ？それに口調も男の子だもん。それがどうしたの？」

秋葉。それでも俺を女の子だと思ってる人がいるんだ。

「?…お兄ちゃん、谷口君たちが待つてるよ。早く行こうよ」

谷口を見ると、早くしやがれ!、という目で俺を見ていた。秋葉も見ているため笑顔だけど。

「そうだね」

俺と秋葉は谷口の席に向かった。

「遅いぞハルト!」

「ごめん、ごめん。悪かったから睨むな」

谷口と対象的に巧は笑顔で自己紹介している。

「よろしく、細川さん。僕はハルちゃんの友達の今村。よろしくね」

だから、巧。ハルちゃんはやめろと言ってるじゃないか。

「よろしく願います、今村君。ふうん、お兄ちゃんってハルちゃんって呼ばれてたんだ。変なニツクネームね」

「未だに、そう呼んでるのは巧だけけどね」

中学に入ったら、皆は俺をハルトと呼ぶようになったし。

「もう時間もないし、そろそろ……」

「細川さん！」

突然、谷口は巧の言葉を遮さへぎって、そう叫んだ。
急に叫ばないでよ、クラスの目線が痛い。

「えと……どうしました？」

秋葉はちよつと引きながら、続きを促す。

「俺は、谷口。。。です！よければ俺と付き合ってください！」

いきなりなに言ってるんだろう、こいつは。玉碎たまくだされるに決まってるだろ。

秋葉はなに言ってるのこの人、という表情で谷口を見ている。まあ、そりゃそうだろうけど、顔に出てるよ。

秋葉はいつもの笑顔に戻り、それを見た谷口の表情が明るくなる。もしかして承諾するのか？やめといたほうがいいと思うよ。

笑顔のまま、秋葉はゆつくりと口を開いた。

「ごめんなさい、いきなりは無理です」

笑顔で断った。

秋葉……いい判断だよ。

しかし、谷口にとつてはダメージ大のようで、脱け殻のようになつて動かなくなった。死にはしないし、ほつとこう。

谷口の玉砕劇を見ていたクラスメイトからは、女子はやっぱりね、という感じで、男子は安心したようなため息を吐いたり、谷口に哀れみの目を向けている。

その後、クラスメイトはすぐに食事を再開した。谷口が振られるのはいつものことだからね。

秋葉は何事も無かつたかのように俺の隣に座り、弁当を広げた。巧は準備が出来ていたので、すでに食べはじめている。

「どうしたの？お兄ちゃんも食べないと時間ないよ？」

「う、うん」

時計を見ると残り五分を切っていた。

俺は慌てて弁当を広げて食べ始める。俺の弁当を見て、秋葉がこう言った。

「意外と小食なんだね」

「うん、まあね。今日は時間ないし、ちょうどよかったけど」

秋葉の弁当を見ると、普通の女の子が食べるぐらいの量だった。そんなもんかな。

巧は意外と大食いだ。谷口は知らない。

「それにしても、よく似てるよね。さすが双子だね。制服が一緒だったら、まったく見分けがつかないよ」

巧が言った。

「そうですか？」

「うん、本当だよ。どっちかが髪を伸ばしたらわかるけどね」

それは、髪を伸ばしてくれということなのかな。俺はこれ以上伸ばすつもりはないけど、切りつもりはある。が、母さんが許さないので不可能だけど。

「そうですか。なら私が伸ばします。ついでに髪型も変えます」

秋葉がそう言った。

ありがとう、秋葉。俺がこれ以上伸ばすと、余計に女の子と間違えられるところだった。

「ごめんね」

巧はそう言って食事を再開した。

その後、谷口以外が食べ終わると、ちょうどチャイムが鳴って解散となった。ちなみに谷口は、まだ脱け殻状態だ。お昼抜きで午後を持つのかな。

昼休みが終わって、午後の授業も午前と同じように過ぎ、下校時間となった。

「ハルト！さつさと帰るわよ！」
「はいはい」

わかったから、もう少し声のトーンを落としてよね。弟として恥ずかしいからさ。

とまあ、口に出したら殴られそうなことを考えて、教室を出ようとすると、秋葉に呼び止められた。

「あ、待つて。私も一緒に帰っていい？」

一緒ということは、家が近いのかな。そう言えば家の場所を聞いてなかったな。明日にでも聞いてみよう。

「俺は別にいいけど…」

俺はハルヒに目を向ける。

「勝手にしなさい」

そう言つて、ハルヒは歩き出してしまった。

「ごめんね。ハルヒは素直じゃないから」

「ううん。私は気にしないから」

いい子だ…秋葉はモテるだろうな。この先一週間は下駄箱はラブレターでパンパンになるだろう。

「じゃあ、帰ろうか」

「うん、お姉ちゃんに追いつかないとね」

もう、ハルヒは下駄箱まで行っているだろうけどな。

それにしても、ハルヒは意外に照れ屋なのかな。あの心を深く抉

つてくる喋りは照れ隠し？…それはないか、いつもあんなのだったね。

「お兄ちゃん」

「へ？」

くだらないことを真剣に考えていた俺は、突然声をかけられて、変な声を出してしまった。こんなこと考えるだけ無駄と思い、秋葉に答えることにしたのだが…

「どうしたん…」

俺が聞き返す前に、俺は後頭部を固い何かで殴られて、言葉を遮られた。

「痛ったい！」

俺は涙目で後頭部を押さえてしゃがみこむ。何かの角で殴られたようだった。誰だよ、谷口か？いや、それは無いか。秋葉にふられてから脱け殻のようになっていた。じゃあ、一体誰が…

「いつまで演技を続けてんよ、ハル兄。もう誰も見てないってのに」

…え？

幻聴かな、秋葉が言っているように聞こえた。そうだ、誰かに後頭部を殴られたせいで耳がおかしくなったんだ。

俺は声の主を探してキョロキョロと見回す。

「なにアホみたいにキョロキョロしてんのよ、妹として恥ずかしいからやめてよね。というか、目を合わしなさいよ。失礼じゃない」

俺は恐る恐る秋葉に振り向く。

「やっと目を合わせた」

そこには、俺をしっかりと見据えて、不機嫌そうに目を細めている秋葉がいた。

「あ、あのどうかしたの？というか、演技ってなにかな。秋葉のほう演技してるんじゃない？」

突然、体が宙に浮いた感覚がして、背中が床に叩きつけられた。

「痛った！」

何をされたんだ！？急に体が…

倒されて困惑している俺の腹を、秋葉は踏みつけて、こう言った。

「あんた知らない間に頭でも打ったんじゃない？あの優等生の私が演技で、このドSの私が本当の私。わかった？」

自分でドSって言ってるよ…でも、どうして演技なんてしてるんだろう。

「秋葉、ひとつ聞いていいかな」

俺が立ち上がりつつそういうと、秋葉はうつとおしそうに俺を見た。

「何よ」

軽く睨まれたが、俺はかまわず続けた。

「どうして演技なんてしてるの？」

俺の疑問に秋葉はため息を吐いて、こう言った。

「本当に頭大丈夫？調査員が愛想よくしないでどうすんのよ。異世界での調査の基本よ？」

「……へ？」

ちよつとまで、おかしい。どうして秋葉の口から異世界という言葉が出てくるんだ。痛い電波を受信しているのでなければ、俺と同じ世界から来ている異世界人になるのだからけど、俺が記憶喪失でなければ秋葉が異世界人だという記憶はないはず。

俺は転生する際にもらった異世界人設定を振り返る。……駄目だ、秋葉が異世界にいたということさえ思い出せない。

神様のミスかな。そうでなければハルヒの願望？今のところはこれしか思いつかない。

「真剣な顔して、どうしたのよ。もしかして、私が異世界人ということを、覚えてないの？」

どうやら、混乱が顔に出ていたようだ。それだけで見抜く秋葉もすごいけど。

俺は素直に肯定する。すると、秋葉はため息を吐いて、情けないわね、と言った。なんだよ。

「統合思念体に記憶を書き換えられたのね。気をつけてって言ったのに、聞いてなかったの？」

それもあるかもしれない。朝倉か？長門がそんなことをするとは思えないから、そうなるのだけど、一体なんのためにそんなことを…俺が何も言わず黙っていると、秋葉は、しょうがないわね、と言って統合思念体書き換えられたのであろう部分を話始めた。

「よく聞きなさい、一度しかいわないわよ」

俺は聞き漏らさないようにする。

「私とあなたは双子の兄妹。これは、こつちの世界と変わらないわ」

さつき、俺のことをハル兄と呼んだので、そこは間違いない。

「私達は上司の異動命令で、こつちの世界で活動している調査機関の第5支部に配属になった」

いきなり俺の記憶にない情報が出てきた。こつちの世界に調査に来たところまでは設定にあるのだけど、調査機関の情報はなかった。第5、といことは他にも支部が存在している。他にたくさん世界が存在していることになる。

「しかし今年に入って、涼宮ハルヒを中心に大規模な時空振動が起こった。これによって世界と世界を繋ぐ狭間に大きな歪みが発生、元の世界に帰るところか本部との通信さえ出来なくなってしまい、我々、第5支部は孤立してしまった」

「孤立した我々第5支部は元の世界に帰る手掛かりを見つけるため、時空振動の原因、涼宮ハルヒの調査をすることになった。そこで他にも涼宮ハルヒに近づこうとしている勢力が存在していることが発

覚。その中でも大きな組織は、特殊な力を持った人間で構成されている『機関』、未来から調査にやってきた『未来人組織』、宇宙を支配している『情報統合思念体』の3つ。

我々はこれらの勢力を出し抜くため、経歴を書き換え、涼宮ハルヒの家庭にエージェントを派遣した。それがハル兄ね」

なるほど。でも、ここまで設定がグチャグチャに書き換えられているということは、ハルヒの力によって書き換えられているということになるね。でなければ辻褄が合わないしね。

「まあ、こんな感じね。何か質問はあるかしら？」

「質問ならあるよ。まず、この学校に俺以外のエージェントは何人ぐらい潜んでるの？」

「ハル兄と私の二人だけよ。我々、第5支部は二年前にできたばかりで、人が少ないのよ。私もここに潜入する予定ではなかったんだけど、あんたが一ヶ月に一回の定期報告を寄越さないせいで、通信しようとしても繋がらないので派遣されることになっちゃったのよ」

定期報告なんてあつたんだ…全然知らなかった。

「そうなんだ…ごめんね。でも、一ヶ月に一回ということは、もっと早く気づいたんじゃないの？」

「他の勢力が涼宮ハルヒの弟であるハル兄を放っておくと思ってるの？そいつらの監視を出し抜くのに時間がかかったのよ。下手に動いてハル兄が私達のエージェントだとばれたら殺される可能性だってあるのよ？」

たしかに。機関の強硬派あたりに殺られそうだ。

「なるほどね。一応理解は出来たよ」

新学期と弁当 2（後書き）

感想やアドバイス等々お待ちしております！

新学期と弁当 3 (前書き)

今回は千文字程度と非常に短いです。すみません。

新学期と弁当 3

まだ納得できないところもあるけど、それはまた今度でいいよね。俺が理解できたと言ったのを聞くと、秋葉はカバンの中に手を入れた。何を出す気だろう。

「はい、これ。いつでも肌身離さず持っておくのよ」

秋葉はカバンから取り出した物を俺に差し出した。

「これは何？」

それは白い布に包まれていた。手に持つと、硬い感触とサイズにしてはズシリと重みを感じた。えー、これはまさか……

「護身用の拳銃よ」

俺は驚きのあまり、固まってしまった。いや、だって、いきなり銃を渡されたのだから仕方ないだろ。

「……俺まだ捕まりたくないんだけど」

この若さ（正確には31年）で警察にお世話になるのは御免だ。まだキヨンや朝比奈さんとも出会っていないっていうのに。

「そっち方面は根回しをしてあるから大丈夫よ。安心しなさい」

「自分が銃を持っているだけでも充分怖いよ」

もしかして異世界人組織はけっこうな規模だったりするのかな？

だとしたら機関や統合思念体とも接触済みだったりするのかな。

「早く片付けないと一般人が恐がるわよ」

そう言われた俺は周りを見回す。幸い人には見られていないようだった。急いで銃をカバンに入れる。

なんだかややこしいことになってきたな…

俺は重い重いため息を吐く。すると秋葉が突然思い出したように言った。

「私も涼宮ハルヒの家に住むことになったからあんたの部屋半分貸しなさい。抗議は認めないからね」

「さいですか…」

俺はもうひとつため息を吐いた。もうどうにでもなってしまう。

その後、無事ハルヒに追い付いて不機嫌オーラ全開のハルヒに付いて家に到着した。

俺は玄関をくぐって真つ先に自分の部屋に駆け込んだ。カバンから銃を取り出して机の一番下の引き出しにしまった。これは非常事態が起こった時の為に隠しておこう。

「ふん。これがお兄ちゃんの部屋か」。意外と片付いてるんだね」

突然、ノックもしないで秋葉が入ってきた。この口調は演技モードだ。

「ど、どうしたの？」

動揺が顔にでないように努力したのだが、思いつきり声が裏返っ

てしまった。先程秋葉の本性を知った俺には、あの笑顔が恐ろしいだ。

俺の問いかけに秋葉は笑顔を崩さずにこっちに歩み寄ってきた。秋葉は俺のそばで立ち止まると、顔を近づけてきた。今度は一体何なんですか。

「…今週の日曜日に組織のアジトに案内するわ。準備しときなさいよ」

それだけ伝えると秋葉は部屋を出ていった。

日曜だね…また俺の貴重な休日に予定が入ってしまった。

その後、十分ほど部屋でゴロゴロしながら対策を考えたが、母さんの夕御飯ができたという声で中断し、一階に降りた。

まあ日曜日まで時間があるのでゆっくり考えていこう。

新学期と弁当 3（後書き）

感想、アドバイス等々お待ちしております!!

重要なお知らせ

どうも、フクヤンです。

突然で申し訳ないのですが、11月10日にこの小説を削除させてもらいます。ホントすいません。

理由は作者の実力不足で設定がよくわからないものになってしまい、まだ序盤だというのにこの調子ではこれ以上進んでも、さらにややこしくなってしまうと思ったからです。

今まで読んでくださっていた皆様。本当にすいません。

小説を削除した後、この作品の書き直しをしようかどうか迷っているのですが、皆様の意見をくださいませんか？
下の選択肢から選んでほしいです。

その他、アドバイスなどもできればください。

- 1、書き直しをする
- 2、書き直しをしない
- 3、完全新作の二次創作を書く

今回は作者の都合で作品を削除することになってしまい、本当にすいませんでした。

書き直しか新作のどちらかわかりませんが、こんなことがないよう

にしてみせます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8371w/>

細川ハルトの転生

2011年11月5日00時42分発行